

2024年度 八戸学院大学

地域経営学科・人間健康学科・看護学科

一般選抜Ⅰ期

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

民主政治では、話し合ってから決めるということが基本です。

話し合ってから決めるというのは、「話し合う」と「決める」という二つの異なる①ヨウソから成り立っていますが、この二つの間に、ある種のAがあることは明らかです。ずっと話し合っていれば、決めることはできません。決めるためには、どこかで話し合いを打ち切らなくてはならないからです。

民主政治が大切だということについては、今のところ②ゴウイがありますし、民主政治を運営するにあたって、話し合ってから決めるべきだということも広く受け容れられるでしょうが、どこまで話し合い、どこで議論を打ち切って決めるのかについては、つねに対立点となりうるわけです。この対立をどう扱うかは、1それ自体が、きわめて政治的な問題となります。政治的な問題とは、それについてのたった一つの答えはないような問題です。

一般的には、すでに自分たちに都合のいい制度などをもっている側は、そのことが争点にならないようにするのが当たり前です。B、争点化そのものを避けるわけです。それでも、もしも争点化してしまえば話し合いには応じなければなりません。その場合には、できるだけ話し合いが続くようにしたほうがいい。議論の打ち切りには反対し、Cであるといい続けることになります。

これに対して、現在の状況に不満を感じている側は、まずは、そこに争点があるということを認めさせなければなりません。話し合いに持ち込まなければ、何も始まらないからです。そして、話し合いが始まった後は、もう十分だから早く決めるべきだと主張するでしょう。

二つの態度は、それぞれの人びとが置かれている立場からくるもので、どちらが正しいとか間違っているということとはいいがかりです。しかし、2近年の政治では、物事を変えようとする側が主導権を握り、現状を維持しようとする側は守旧派や抵抗勢力などと呼ばれて、悪役にされがちです。現状維持は③タイハイにつながり、D変化は進歩につ

ながるという考え方が強く、話し合いを重視するのは悪いことで、早く決めることこそが「改革」であり正しいことだということになってしまふ。歴史をふり返ってみても、時代が閉塞感を強めたときには、決定や決断に対する期待感が高まります。話し合つて物事を決めようとする、思い通りに物事が進まず、いろいろな面倒なことが伴うわけで、いらだちも④チクセキしていく。そこから、すぐに決定してくれる独裁者への誘惑が⑤フンシュツしてくることもなるわけです。

しかし、考えてみると、何でもすぐに決定して現状を変えることが正しいということに、一般的な根拠があるわけではありません。現状維持が悪くて、変えるのが一概によいという保証はどこにもないのです。もつと悪くなることも論理的にはありうる。しかし、人は今の苦しみから逃れるために、今とは違う何かを求めるものでもあります。何でもいいから変えるべきだという意見が力もちやすい。だからこそ、3その点の危うさをより強く意識すべきだと思います。

杉田敦『政治的思考』より

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 Aに入る語として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 権力関係 イ 因果関係 ウ 緊張関係 エ 上下関係

問三 傍線部1「それ自体が、きわめて政治的な問題となります」とあるが、なぜか。最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ある問題について、話し合うこと自体が、民主政治にとって重要なプロセスだから。

イ どこまで話し合い、どこで決めるかについて、唯一の正しいタイミングはないから。

ウ 政治においては、話し合いで決められたことは、必ず守らなければならないから。

エ 現代政治では、すでに自分たちに都合のいい制度をもつ人々が、話し合いを阻むから。

問四 Bに入る適当な語を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア そして イ つまり ウ そこで エ あるいは

問五 Cに入る語として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 半信半疑 イ 一朝一夕 ウ 支離滅裂 エ 時期尚早

問六 傍線部2「近年の政治」とあるが、筆者が考える「近年の政治」の問題点について、四十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部3「その点の危うさをより強く意識すべきだ」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 今の苦しみから逃避して変化を求めることは、必ず後に独裁者を生むことにつながるから。

イ すべてのを変えることが一概によいとはいえず、一部の変革で十分な場合が多いから。

ウ すぐに現状を変えてしまつて、さらに状況が悪化することもありうるから。

エ 速やかに意思決定するのがよいことで、現状維持が悪いことだとは言いきれないから。

問八 波線部D「変化は進歩につながる」とあるが、このことについてあなたの考えを百字以内で書きなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その男が入って来ると、朋輩(注1)のおまちがおもんの脇腹をこづいた。

「ほら、来たよ」

そう言った声が笑いを含んでいる。

「行つてあげなよ」

おもんは顔が赤くなつた。そろそろ来る時刻だと、心待ちにしていた気持ちを、おまちに見すかされた気がしたのである。1 あらがうように 言つた。

「べつに、あたしじゃなくちやいけないっていうんじゃないのにさ」

だがそのとき、客の一人がその姉ちゃんや、酒だ。と言つて高うかかげた銚子ちやうしを振つたので、おまちはさつさとそっちの方に行つてしまった。行くときに、おもんの臀しりのあたりをぽんと叩いて行つたのは、遠慮しなさんなという意味なのだろう。

おもんは盆を抱えて、その男の方へ近寄つて行つた。飯も喰わせ、酒も飲ませる店の中はほどよく混んでいたが、男はすぐにあいている腰かけを見つけて坐つた。

「いらつしやい」

おもんが声をかけると、男は微笑をむけて、飯と肴さかなをくんな、と言つた。

「肴は鯖の味噌煮といわしの焼いたのと、どちらにします？」

「いわし」

男は短く言つた。小声だつた。

「味噌汁は大根ですよ」

おもんがそう言うのと、男はもう一度あつさりした **A** をむけた。男は千切り大根の味噌汁が好きなのだ。

無口な男だが、①スジヨウは知れている。春先から角の桶安^{おけやす}で働いている、重吉という職人である。桶安の前を通ると、竹を割ったり、足で桶を回しながら、木槌^{きづち}をふるってタガをはめたりしている重吉の姿を見かける。

身のこなし、手さばきが素人眼にもあざやかで、年季の入った桶職人だとわかる。重吉は、どこかで桶職人の奉公をおえた職人で、この春から角の桶安に雇われているのだと思われた。

「2 だったら、かみさんをもらうのもこれからということだね」

無口な桶職人が、飯を喰いに来るようになってひと月ほどし、そういう事情がわかったころ、おまちが、けしかけるようにそう言ったことがある。

おまちは時々、おもんにけしかけるようなことを言う。店の給仕女は三人だが、おまち自身は②シヨタイ持ちで、もう一人のおすみはまだ十六の小娘だった。出戻り^{（注2）}で二十一のおもんを、おまちは半ばはからかい、半ばは本気で、あの客はどうか、この客は似合いだとか言ってけしかける。

むろん馴染みの客の誰かれを、ひとり身のおもんに結びつけて面白がるのは、ひまつぶしの冗談のようなところもある。おもんもそれをいちいち **B** にうけるわけではない。おすみと一緒にになって面白がったりする。

だが重吉のときは違った。重吉がはじめて飯をたべに来たときに給仕したのがおもんだった。そのときおもんは、初顔のその男が、店に来るこれまでの男たちと、どこか違っていているような気がしたのである。

長身で広い③カタハバを持ち、手は職人らしく④ブコツだった。いわゆるいい男というのではなかったが、眼に落ちついた光があり、ひき結んだ口のあたりに男らしい気性がのぞいている。そして無口だった。笑うときにも、歯をみせず眼だけで笑った。

そういうひとつひとつの印象が、いつの間にかはっきり頭の中に刻まれるようになったのは、おもんがそれだけ、ふだん重吉という男をよく見ているということになる。重吉はほかの馴染みの男たちのように、気安く女たちをか

らかったり、酔っぱらって隣に坐った客や、店の者にからんたりすることはなかった。飯を喰いに来るだけで、酒は飲まなかった。

だから、おま치가けしかけるように、重吉のことを言ったとき、おもんもそうかと思ったのである。重吉は昼と時には晩にも飯を喰いに寄ったから、ひとり暮らしだろうという⑤ケントウはついていた。

しかしそれだけのことで、おもんはおま치가半分は面白がつて期待しているように、自分から重吉に近づいたりする気はなかった。すっかりしたひとり者の職人がいる。このひとのかみさんになるのは、どんな娘だろうといった程度の関心を寄せるだけである。重吉という男に、自分を結びつけて考えたことはなかった。

ただ、3さっきのように、おま치가氣を利かせてくれたりすると、悪い氣持ちはしない。軽い浮いた氣持ちになる。いまも飯を運び終わり、ほかの客の世話をしながら、4おもんは時どき重吉の方にちらちらと眼を走らせた。そういう様子を、いつの間にかおまちやおすみがちゃんと見ていて、あとでおすみまで一人前におもんをひやかしたりするのだが、それもおもんは悪い氣持ちはしないのだ。だが、やはりそれだけのことだった。

おもんの氣持ちの隅には、自分は出戻りだという、あきらめた氣持ちがひとつある。その氣持ちがあるから、なんとなく重吉に眼がいくのも、おまちやおすみの眼から隠そうなどとは思わなかった。男がうまそうに飯を喰っているのをみて楽しむだけである。

藤沢 周平『驟り雨』より

(注1) 朋輩：ほうばい。仲間。同じ主人に仕える者。

(注2) 出戻り：女性が離婚して実家に帰っていること。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部1「あらがうように言った」とあるが、その理由を文中の語句を用いて五十字以内で答えなさい。

問三 Aに入る適切な語を、文中から抜き出して漢字二字で答えなさい。

問四 傍線部2「だったら、かみさんをお願いのもこれからということだね」と言ったときのおまちの心情として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 重吉がこれからどのようなかみさんをお願いのか、興味を持っている。

イ 重吉はきつとおもんをかみさんを選ぶだろうと、うれしく思っている。

ウ 重吉には今はかみさんがいないようだから、おもんがなればいいと思っている。

エ 重吉は腕がよい職人なのに、まだ結婚していないのを不思議に思っている。

問五

B

に入る適当な語を、漢字一字で答えなさい。

問六

傍線部3「さっきのように、おまちが氣を利かせてくれたりすると」とあるが、おまちが「氣を利かせて」取った行動を、文中の語句を用いて四十字以内で具体的に答えなさい。

問七

傍線部4「おもんは時どき重吉の方にちらちらと眼を走らせた」とあるが、おもんがそのようにする理由を、文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

〈問題終了〉